古戦場の思い出

まがりまめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
古戦場の思い出

【Ｎコード】
Ｎ９６７９Ｐ

【作者名】
まがりまめ

【あらすじ】
高校生の石田は夏の終わり、ふと何かに呼ばれたように関ヶ原古戦場へと足を運ぶ。

01（前書き）

＊転生物です。苦手な方はお控えください。

01

２００４年、９月１５日。
まだ暑さののこるこの日、ふいに古戦場へ行ってみようと思い立った。
なぜかはわからない。ただ、行ってみよう、いや、行かなければいけないという気持ちがふつふつとわきあがってきたのだった。目的地は、関が原古戦場跡。
新学期も始まって早々のこの日になぜこんな気持ちになったかさえわからない。まだ夏休みの気分が残っているのだろうか、そんなことを考えつつも学校かばんに私服をつめこむ。駅のトイレででも着替えよう。制服はコインロッカーにあずけてしまえばいい。
何事もないかのように、家をでた。
まだ夏の名残か、蝉が鳴いている。まるで、残りの命を燃やしきるかのようにその鳴き声は真夏のそれとくらべると、はるかに弱弱しいものだった。
学校へは自分で連絡をいれ、同じ制服の学生が通りすぎるのを公園のベンチの上でボゥっとながめていた。通学時間に駅に行くのはさけた。人が多いし、なにより同級生や電車通勤の先生にでも見つかったらおしまいだったから。
７時に家をでてから始礼の始まる８時３０分までの１時間半、ベンチの上でじっとしていることにした。
暑い。住宅街の公園である。日が昇るにつれその暑さはまし、額に汗が染みてきた。ハンカチなどきのきいたものはもっておらず、制服のそでで雫となって落ちる前にぐいとぬぐう。
去年の九月はこんなに暑かっただろうか。いや、その前にこんなに蝉がうるさくないていただろうか、そんなことを暑さのせいかよくまわらない頭で考える。しかし、何故突然関が原になんて行こうと思ったのだろうか。自分の家から行けないことも無い距離だとはわ

かっていたが、行く気などさらさらなかった。というか、関が原自体、中学校の歴史の授業程度の知識しかもちあわせていない。１６００年、徳川家康が石田三成をやぶった「天下分け目の合戦」と呼ばれる戦。戦国時代に終止符を打つことになった、だっけ。日本史に授業以上の興味をもって接してみようなどとは1度も思ったことはなかった。が、今決められたことをやめてでも、その歴史に触れに行こうとしているのである。

おかしなこともあるものだ、そう思いつつも公園のベンチから腰をあげた。軽く土を払い、腕時計をみる。

８時２７分。そろそろ、頃合か。

横に置いてあったかばんを持ち上げ、駅にむかった。さほど大きな駅でもないのだがショッピングセンターと合体しているため、実際よりも大きく見える。

いつもとは違う切符を買い、機械に通す。機械音がして、問題なく通れた。まっすぐにトイレに向かう。

個室に入り服を着替えた。まだ暑い。格好は真夏のものとさほど変わりがなかったが、すこし大人に見えるような服を選んできた。補導なんてされたら、たまったものではない。

トイレからでて、コインロッカーに荷物を全部あずけ、いつもとは反対向きの電車にのった。

鈍行である。駅は大きいのにいまだに肝心の乗り物は動きが遅く、まったくちぐはぐだなといつも思う。しかし文句も言っていられない。ここ周辺に駅はこれしかないのだから。

少しまつと、ピークをすぎてがらがらになった電車がやってきた。ぽつぽつとしか人が乗っていない。電車に乗りこみ人のいない車両にすわる。人が嫌い、とか貸切気分を味わいたいとかそういうのではなく、ただ単に体が勝手にそちらへ行ってしまっただけのこと。今日は人に干渉されたくない。

一人関が原に行き、一人ただただ昔そこであったろうことに思いを馳せてみたい。平日だから、観光客もいないし丁度良かろう。数秒

して電車がきしみながら重たげに動き始めた。

１６００年、９月１４日
緊張の解けぬ夜、三成はイライラと陣中で歩き回っていた。眠れない。眠れるはずも無い。明日は戦なのだ。
布陣どおりに事が進めば、絶対に勝てる戦である。
しかし相手はあの徳川家康公である。戦がどう転んでも、おかしくない状況だった。
勝てる、いや、勝てない・・・・
悶々と頭の中で二つの言葉が繰り返され、おさまらせようとしても、やまない。
秀吉のつくった世は、明日くずれようとしている。いや、秀吉が没した瞬間から少しずつ崩れてきていたのかもしれない。明日、東軍が勝とうが西軍が勝とうが、両軍どちらにも、秀吉の姿は無い。あるのはその部下だった武将達だけである。
「俺が勝てば秀頼様に天下をお渡しできる・・・」
家康が勝てば、天下はあの狸のものになる。
今は亡き秀吉が、最後まで気にしていたのは自分が死んだあとの秀頼のこと。武士の反乱がおこれば、一たまりも無いであろう。そのための大名を束ねておく策を秀吉は講じていなかった。秀頼はまだ幼すぎる。だれか、助けが必要であった。
“亡き秀吉様のためにも、絶対にこの天下、我が手中に”
三成がずっと思いつづけたことであった。
「殿、おられますか」
と、聞きなれた声がした。
「左近か」

そちらのほうを向くまでも無い、声の主はわかりきっている。三成の一番の家来である島左近である。左近は三成にとってなくてはならない存在であったし、家来と言うよりは同格のものという印象が強かった。
左近はゆっくりと三成の前に行き、言った。
「ついに明日ですな」
「うむ」
「心の準備は？」
左近は三成の心中ぐらいは察していた。察していたからこそ、今ここにやってきたのである。
自分の主君は今絶対に悩みこんでいるだろう。何時まで続くかもわからぬこの大戦に多くの不安をかかえつつ。
「・・・正直」
三成が左近に背をむけ、上を向いた。おそらく、顔をみられたくないのだろう。こういうときどんな顔をしているのか、わからず、自分に心配をかけたくないのだろう、そんな主君の気遣いに左近はふと口元をゆがめた。
「怖い」
ぽつりといったその言葉は、おそらく左近の前以外ではけして口にすることはないだろう、台詞。
「不安と緊張と・・・・いろいろまざって、怖い」
この天邪鬼な男にしては必死に素直に感情をあらわしたのであろう。普段めったに素直にならないせいか、言葉に乏しい。その分、損しておきたのが、この戦といっても過言ではないだろう。
左近は予想どおりの返答に苦笑し、重みのある声で話し始めた。
「・・・左近もそうでしたよ、殿。大きな戦の前にはかならずといっていいほどその恐怖がつきまとうものです」
「今もか」
三成が少し左近のほうをみる。すると、くるりと今度は左近が三成に背をむけた。

「いえ、今は蚊ほどにも感じませんな」
「・・・・・お前は戦なれしている」
大きな体には、無数の戦の傷跡がある。三成はそれを知っていた。
拗ねたように、下を向く。
「じゃあ殿、左近がその恐怖を感じなくなったのは何時からだと思います？」
くるりと、三成のほうに向きなおす。
そんなもの知るか、と三成は左近を見返した。
左近はその顔にほほえみ、
「殿に仕えてからですよ」
と、言った。
三成ははじめ、ぼけっとした顔で左近を見ていたが言葉を理解する内に左近の顔なんぞまともに見られなくなりまたくるりと左近に背をむけてしまった。それを観察していた左近はやはり予測したとおりの主君の行動に苦笑する。
年の離れた左近からしてみれば、三成の行動など手に取るように分かるものであるしその時折見せる子供のようなしぐさがたまらなくかわいく思えるのであった。
「ほ、ほう！何故そう断言できる？」
すこし裏返った三成の声が飛んできた。恥かしくもあるが、理由を聞いてみたかったのであろう。
「・・・言ってもいいですけど、殿はきっと怒りますよ」
理由、といわれてとくにあるものでもなかったのだが、ふと思い立ったことを言ってみようと思い、しかしそれを聞いたら自分の主君は怒るだろうなぁと思いつつもついついきいたらどんな顔をするだろうかと興味本位に手を出す。
「かまわん。言ってみろ」
恥が興味に負けたか。三成は勢いよくくるりと左近のほうを向いた。
次の言葉に期待するような眼差しをむけてくる主君の顔をみてじゃあ遠慮無く、と左近は口を開いた。

「自分の事よりまず殿の事が気になるようになりましてね」
「は？」
「殿って、なんだかんだ言ってかなり危なっかしいじゃないですか？」
ほっとけないんのですよ、と良い意味をこめて言ったつもりだったのだが。
「なんだ、それだけか」
そう言ってまた背をむけた主君はなにもないようだが絶対にすねているのだろうから、あとには何もいわなかった。
ここで何か言っては、仕返しの言葉がつきささるだけである。
まったく、少しはよいほうにとってくれればいいのにと幾度おもったことか。損な性分である。
しばらくの沈黙の後、三成がふいに
「左近」
と名を呼んだ。
「なんでしょう？」
「明日の戦、頼りにしているぞ」
それだけ言い残し、三成はスタスタとどこかへいってしまった。
「・・・しっかり良い方にとってくれてんじゃないですか」
“あぶなっかしい”その言葉の裏にあった、もう少し自分に頼ってくれてもいいということ。
しっかりと自分の主君には伝わっていたようである。
はじめてあった時にくらべると、成長したなあと感じ頬が緩んでいくのが自分でも感じ取れた。

02（前書き）

＊転生物です。苦手な方はお控えください。

02

何個か駅を通りすぎて自分が眠っていたことに気がついた。
目的の駅をとおりすぎてはいないか、急いでキョロキョロと見まわすも、分かるはずが無い。
と、一人の男の存在が目にとまった。自分と向いの席に座っている。さっきまではいなかったのに。自分が寝ている間に入ってきたのだろうか。
しかし、なんでわざわざ向いに座っているのだろうか。三両編成のこの列車、座るところは腐るほどある。
同じ車両に座るとしても、なぜ向かいに座ったのか。
すこし居心地の悪さを感じ、しかしここを今更移動するのも変だと思ったので少しのことは我慢することにした。
男はおそらく社会人であろうが、とてもいまから仕事に行くような格好ではなかった。
どちらかと言えば、休日向きの格好である。
「（いまから出勤だとしたら、上のほうか）」
おちつきを持ったその態度からは、会社の重役にみえなくもない。
と。
さりげなく観察していたつもりが、ばっちりと視線があってしまった。
まずいと思い反射的に目をそらす。
やはり、相手を観察するのはよしたほうがよかったのか。さきほどよりさらに居心地が悪くなるのを感じた。
電車が、駅に止まった。ドアが今にも壊れるんじゃないかとさえ思うような動きで開いた。
外の熱気が車両に入り込んでくる。遮断されていたせみの声は、朝のものより元気になった気がした。

「いよいよですね」
「うむ」
翌朝。西暦１６００年９月１５日、関が原の戦いの日である。
朝から霧が晴れず視界が利かない日だった。
「殿、もし、の話ですが」
左近がまえまえから聞きたかったことである。
しかし、三成はその続きをゆるさず、
「もし、は無しだ。意味も無い憶測は無駄だ」
布陣は完璧すぎるほど。勝つ要素は大きい。
しかし、戦の相手、徳川家康はそれでも堂々と布陣している。
危ない賭けは、しないはずの老人であった。なにか、策があるとしか思えない。
その策が、思い当たってはいる。思い当たっているだけに負けるかもしれないという気持ちがどうしてもせりあがってきた。

戦が、始まった。
「左近、持ち場へ行け」
最後までそばにいてくれたが、やむをえない。
「殿」
「なんだ」
「もし、ですよ」
左近の言葉に三成が首をあげ、あきれた風に見上げた。
「またか」

さきほど意味も無い憶測は無駄といったばかりなのに、もうそれをしている。
「聞いてください」
しかし、左近も引かない。もしかしたら、一生もうあえないかもしれないのである。左近はこの戦で死ぬつもりであった。
左近の真剣な面持ちに光成も言葉を許す。
「きこう」
「ありがとうございます。ずっと考えていたことなのですが、もし――――・・・」
「伝令！」
と、突然兵が飛び込んできた。自体ははやくも切迫しているようである。
伝令兵の話をきき、三成はすばやく指示をだした。横で見ていた左近はこんな事をしている場合ではないと思い自らの武器を持って駆出そうとした。
もし泰平の世であったならば、自分たちは会っていただろうか。はたまた、こんなに親しき間柄になっていただろうか。
左近がいつからかずっと思いつづけていた事であった。聞こう聞こうと思いつつも戯言だと、きり返されるのがおちであろうからと、冗談でもいい、ちゃんと答えをかえしてくれる機会をうかがっていた。
今、聞こうと思っていたのだが、どうやら自分には機会は回ってこないようである。
しょうがない。もともと三成の言うとおり、たいした意味も無い無駄な憶測にすぎないのだから。
「左近！」
小走りに駆出した左近の背に、三成の声が飛んだ。左近は、振り向かない。そんな余裕など、この戦場には無いのだ。
「泰平の世であっても、左近は左近であって、俺は俺だからな！」

駆出した足が、止まりそうになった。
三成の言った言葉が信じられずに、もう1回と言いたくなる。
しかし意思とは反対に、足は戦場へ一刻も早くたどりつかんと止まろうとはしなかった。

午後2時。
西軍は敗走した。
西軍内の裏切りと主力戦力の喪失のためである。
左近は戦中に死に、三成はとらえられ後日京都の六条河原で斬殺された。

０３（前書き）

＊転生物です。苦手な方はお控えください。

03

関が原駅についた。歴史的に有名な土地であろうに、意外と駅はちいさかった。
涼しかった電車をおりるのはためらわれたが、元の目的は電車のためではないのである。
古戦場に向かおう。
どう行けばいいのかわからないので、駅員に聞くことにした。
が、きいても要領をえない答えばかりで結局のところよくわからなかった。
これだから、思いつきで行動するのは困るのだ。下調べがあればこんなことにはならなかったはずである。
どうしようか、ここまで折角来たのに、帰るのは惜しい。かと言って、迷いたくはない。
「中学生がこんなところでなにしてるんですか？」
と、いきなり後ろから肩にポンと手が置かれた。
まずい。
警察だろうか。
「中学生じゃない」
腹をくくってふりかえるとそこにいたのはさきほど電車内で向かいに座っていた男だった。
その姿を見て、ほっと一息つく。よかった、警察じゃない。
「ほう？じゃあ社会人？」
「高校生。」
ぶっきらぼうにそう答えて、何で話しかけてきたのだろうと考える。
「学校は？」
しつこいな。ほっといてくれ。そう思いついついとがった声で
「あなたも仕事はどうしたんですか」
と言った。すると相手はにやりと笑い

「有休ですよ」
と一言。
大人はずるい。
「まあまあ、別に攻めてるわけじゃないんですよ？」
スタスタと歩き出そうとしたら、ついてきた。
「学校に連絡しませんよね？」
その言葉にくるりと振り向き確認をとる。
「ええ。俺が興味もったのはなんで高校生がこんなへんぴなところに学校休んでまで来るのかと思って」
「へんぴなところって？」
「古戦場、でしょう？」
さっき聞いてたじゃないですか。そう言って駅員のほうをさす。駅員はかるく居眠りをし始めていた。
「ついでに、道、わからないんでしょう？」
一緒にいきませんか、と言われとくに断る理由もなく男についていった。知らない人について行ってはいけない、などといういいつけを守らなくてはいけない年でもない。自分にとって安全かそうでないかぐらいの見分けはつく。
単純に、いい人だなあと思った。
「ところで、なんで古戦場に？」
暑い。蝉がうるさくないている。ここだけはまるで夏のようだった。男の質問に少し首をあげ、顔を見る。いくつだろうか。たぶん老け顔だな、と思った。
「気分」
そう言うと男は、
「高校生が、古戦場に行きたい気分、ですか？」
と笑った。嫌味の無い、快活な笑い方だった。見ているこっちまですっとしてくるようだ。
「うるさいな、1人ぐらいいてもいいだろう」
年上に対して、敬語をつかえと仕込まれてきたことには仕込まれて

きたのだが、今日はそんなに口うるさく言う奴もいない。それに、相手も気にしていないようである。
なら、いいか。
そう思い、敬語はなしにした。
男は笑い終え、ふと、そういえばといった。
「そういえば、名前聞いてませんでしたよね？」
「自分からいったらどうだ？」
もともとそっちから話しかけてきたのだし。そう言うと、迷って困っていたのはそっちでしょう、と気を悪くすることも無く軽くかわされた。
「石田だ」
下の名前まで言うこともないだろう。そう思い苗字だけを相手につげた。
そっちは？とかるくうながすと、
「何だと思います？」
と逆に問い返された。
そんなもの知るか、と見返すと男は笑い
「島です」
といった。
「島・・・さん、か」
「島でいいですよ、石田君」
さすがにさんをつけないのはいけないだろうとおもったのだが、さっきからべつに敬語も使ってないし気にするところじゃないでしょうと言われまあそうかなと思う。
「それならこっちも君は余計だ」
「おや、不快でしたか？」
「そういうわけじゃない。ただ――・・」
「じゃあ、いいでしょ。石田君」
上手く、まるめこまれてしまった。大人ってこんな感じにすぐ自分のいいほうに丸め込む。

「（でも、これはこいつの力かな？）」
大人が、じゃなくてこの目の前にいる男が上手いだけなのかもしれない。
きっと、そうだ。

「ここが西軍の陣屋跡ですね」
地図を広げ、島が言った。
ここが、か。
来て見れば、何も無い。たいしたこともない所。
何故自分はこんなところにやって来たいと思ったのだろう？
ただただ、疑問は広がるのみ。
「どうですか？」
「・・・どうですかって？」
「感想ですよ」
島の顔を見上げ、考えた。
「・・・何も無いな」
そう言うと、かれは苦笑し、そんなもんですよと言った。
ふと、おもいつく。
「そういえば、何故島はここに？」
自分は聞かれたが、彼にはきいてはいなかった。
島は微笑み、問うた。
「何故だと思います？」
「また、それか」
分からないことを聞く。それに苦笑した。
「おんなじようなもんです。気が向いた、といえばそうですが呼ばれた感じがしてね」

「呼ばれた？」
不思議なことを言う奴だ、そう思った。誰が呼ばれて、古戦場などへいくものか。
「知ってますか」
島が、何も無い古戦場を見まわした。
「何を？」
少し首をかしげる。
「今日はここで戦があった日なんですよ。西暦１６００年９月１５日関が原の戦い」
島の言葉に、驚いた。偶然か、それとも無意識下でそれを思ってしまっていたのか。
「驚いたでしょ？更にもうひとつあるんですよ」
島が、こっちを向いた。反射的に島を見る。彼の目いたずらっぽく光っていた。
「西軍大将の名前、知ってますか？」
「石田三成、だろう？」
小学校でも習う。覚えてるかどうかは別として。
島はそれをきき、満足気にうなずいた。
「さらにですね、その三成が大事にしていた家臣がいるんですよ」
「ふうん？」
「その人の名前が、島左近」
「島？」
島、といえば、今目の前にいる男も島という苗字じゃなかったか？
「石田三成と島左近が戦った古戦場で石田と島が会うって、すごい偶然じゃありませんか？」
偶然どころのさわぎではない。
誰かが、仕組んだのではないだろうか？
嫌でもそんな考えが頭をもたげる。
「お前、今年はじめてきたのか？」
「ええ。」

「呼ばれた気がするって言ってたよな？」
そう問いかけると、にこりと笑って
「もしかしたら、そうかもしれませんね」
と言った。
「・・・そうなれば、呼んだのは昔の武将か？」
少し冗談めかして言ったら、案の定かれも笑って、
「待ってたらまだ集まるかもしれませんよ？家臣が」
と。
しかしそうは思わなかった。来るのは、左近だけだ。いつも俺を一番助けてくれてたのは・・・
「ん？」
今、何を考えていた？
自分の考えに疑問を抱く。
「どうしました？」
「い、いや。なんでもない」
おかしい。あんな話をされたせいで、自分がはるか昔の戦国の武将の気にでもなっていたのだろうか。
笑えるな。小さな子供でもあるまいし、他人になりきるなどとは。
しかしそのわりにはあまりにも自然に頭にわきあがってきた考えだった。
暑さのせいかな？
そう言えば、日向にいたおかげで頭がすこしぼうっとした。
蝉は相変わらずうるさく鳴いている。
「向うのほうにも行ってみましょうか」
折角ですし、と島が歩き出した。
自分よりはるかに体格のよい彼は、きっとこの暑さなんてへでもないのであろう。
少し、うらやましい。

「島左近はもともとほかの家の牢人でしてね」
気がつけば、島が関が原のことについて話しはじめていた。
自分が知らない、と言ったからであろうか。
普段は頭にも入ろうとしない歴史の話が、すらすらと入ってきた。
「三成が高禄で召抱えたんですよ」
「まて、さっきさんざんほかの奴の高禄をけったと言ってたじゃないか」
と、質問まで入るほどである。
「左近はたぶん三成のなにかに共感したんじゃないんでしょうかね。気に入った、と言ったところでしょうか」
「ふうん」
「ま、三成はだいたいは嫌われ者だったんですがね」
「じゃあなんでその島左近は三成なんかきにいったんだろうな？」
「その人を十分に理解すればいいことじゃないんですかね？理解が足りないから、嫌ったりする、と思うんですがね、俺は」
「そうか」
よい主従だったのだろう。そう思った。
「戦場で島左近は鬼のようだった、そうですよ。関が原後、誰も左近の顔を恐ろしくて覚えていなかったんですって。」
「島左近は、死んだのか？」
「はい。関が原で鉄砲隊に撃たれて戦死しました。三成は捕らえられて処刑されたって話ですけど」
その後は、三成と左近のいろいろな逸話を話してくれた。
島は本当によく知っていて質問したらなんでも答えてくれた。
「本当、くわしいな」
「ま、職業なんで、ね」
「職業？」
「大学のセンセ」

さらっと答えられたその言葉にびっくりした。しかし、なるほど、それならうなずける。
「遊びに来てもいいですよ。ただ、会えるかどうかはわかりませんけど」
そう言って、大学の名前を教えてくれた。
遊びに行く気など、毛ほどにもなかったが。

彼との古戦場めぐりはすぐに過ぎていった。
気付けばもうそろそろ帰らなくてはいけない時間になっていた。
「今日は、有難うございました」
がたごととゆれる電車のなか、島に丁寧にお礼を言った。
「なにをあらたまって。いいですよ、別に」
ただ偶然いっしょの目的地だっただけでしたから。旅は道ずれって言うでしょ？
そう言った島の顔には夕日があたっていた。
1日、今日は長かったようで短かった。
来て良かった・・・・かな。
もう島とも会うことは無いだろう。だいたい、会うことの無いはずだったのだ。
朝あったばかりだけれど、もう昔からの知り合いのような感じだった。不思議な奴だ。
「さてと、俺は次です」
そう言って上着を着る。そうだった。こいつは自分より後に乗ってきたんだった。
もうすこし一緒にいられないのが、残念におもえた。
鈍行でも、こういうときだけ早い。次の駅はすぐにやってきた。
「じゃ」
そう言ったそれに軽くうなずく。

「今日は楽しかった。ありがとう」
まったく、下手な言葉だ。自分でもそう思ったがそんな言葉しか浮かばなかった。
島はにっこりと微笑み手を振った。
自分も手を振り返し、電車が動き出して、やがて見えなくなった。

「おや、石田君？」
「！島！！」
２００５年、９月１５日、鈍行の中。
「どうして、また」
二人はまた同じ道をたどった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9679p/

古戦場の思い出

2011年1月7日07時57分発行